「青い空」は戻ったか

表題は毎日新聞 12 月 6 日朝刊「ストーリー」の 1 面タイトルである。4 面全面は、「巨大企業を訴える　四日市公害資料館と 2 人の語り部」という見出しだ。1 面から紹介しよう。窓外に広がる工場の煙突と灰色にかすんだ空。今年 3 月、三重県四日市市に資料館「四日市公害と環境未来館」がオープンした。研修・実習室は、コンビナートに隣接した 1965 年ごろの市立塩浜小学校の教室を模している。窓からの風景は実際の教室から写した写真を張り合わせた。

硫黄酸化物を含む排煙は、かつて住民の健康をむしばんだ。四大公害病の一つと言われた四日市ぜんそくである。患者は新規認定が打ち切られた 88 年までに累計 2216 人。今年 11 月末現在も 383 人が闘病生活を送っている。四日市公害訴訟の原告 9 人のうち、ただ一人存命する元漁師の野田之一さん(83)は 10 月下旬、資料館を訪れた小学生に囲まれていた。「裁判を始めようとして『国賊や』『縁切りや』と言われた時の気持ちはどうでしたか」。野田さんは太いしわがれ声で、大切なものがあると語りかけた。「健康で幸せという一番大事なものを取られてんな。だからおいらが負け往生するということは、人間として何でや、という根性があったからね。もうだめだという弱気はなかった」

野田さんの隣に、公害を記録し裁判を支援し続けた沢井余志郎さん(87)がいた。語ったのは、ばい煙と健康被害の因果関係を認め、6 社の共同不法行為として原告全面勝訴の判決を勝ち取った 72 年 7 月 24 日の空だ。喜びに沸く原告、支援者を撮ろうとカメラのファインダーをのぞくと、いつもと変わりなく煙突から煙を吐くコンビナートがあった。「裁判には勝った。でも公害がなくならない限り、ぜんそくは続く」野田さんも報告集会でこうあいさつした。「青空が四日市に戻った時に『ありがとう』と言いたい」。その後、確かに青空は戻った。だが、43 年もの間、感謝の言葉を封印するとは思わなかった。公害発生から半世紀今は「語り部」として歩む 2 人の足跡をたどった。

野田さんと沢井さんの話を何回か聞いた。とりわけ沢井さんには、日本環境会議の集会などでお世話になった。　またレポートしたい。　　(2015 年 12 月 11 日)